※ この通信は、これまでの号も含め、矢倉小学校ホームページでもお読みいただけます。

草津市立矢倉小学校通信　令和４年２月１日　NO.17

やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

あとかくしの心

雪は、年末から、繰り返しやってきて、子どもたちを喜ばせてくれた。雪化粧で装われた景色は、それこそ格別なものだ。私が担任だったとき、雪が舞うこの時期になると、きまって子どもたちと読み合った作品がある。木下順二の「あとかくしの雪」である。その話は次のようなもの。

…ある冬の日の夕暮れ。旅人が一人、とぼりとぼりと雪の上をやってきた。ある家に立ち寄り、何もいらないから一晩だけ泊めてくれと頼みこむ。頼まれたのは、毎日の食事もろくに食べることができないような貧しい百姓だった。が、その百姓は、こころよく受け入れ、何か食べさせてやりたいと、しかたなく、日が暮れてから、となりの大きな家の、大根を囲っているところから大根を一本盗んできて、大根焼きをして食わしてやった。その夜は、何しろ寒い夜だったから、旅人は、うまいうまいとしんからうまそうにして、その大根焼きを食べる。その晩、さらさらと雪は降ってきて、百姓が大根をぬすんできた足あとは、あゆむあとからのように、すうっとみんな消えてしまった。この日は旧暦の１１月２３日で、今でもその地方では、この日に大根焼きをして大根を食べ、この日に雪が降れば赤飯をたいて祝う家もあるという…。

子どもたちは、この話を読み終わると、たいてい戸惑ってしまう。作品には盗むことが美談のようにとりあげられているからだろう。私は、単に盗みはよいか悪いかと、このことを伝えようとしている話ではないという構えで、話し合いを聞くようにしている。すると、子どもたちは、確かに盗むのはよくないけど、そう言い切れない何か大切なことがあるのではないかと気づき始める。盗むということも何もかも包み込むように、雪は降ってきて、その証拠となる足あとを「あゆむあとからのように」消してくれるからだ。中には、「雪が」降ってくるのでなくて、「雪は」降ってくるのだという表現に注目し、自分たちを飛び越えた、何か大きな心がそうさせているように感じとれるなどと語りだす。しまいには、この話はすごく大事なことを伝えようとしているのじゃないか、だから昔から人々の中で受けとめられ、受け継がれてきたのだとも。

私が「あとかくしの雪」に魅力を認めるのは、この話にこめられた大切な心が、人を育てる心につながっているのではないかと思われるからだ。子どもたちは、「なんかいい話やなあ」という感覚的なとらえから、綴られている語り口や友だちの発言をもとに、「人のことを思って助けたいという心を誰かがちゃんと受けとめて、応援してくれるような…」とか、「あたたかくやさしい心は、じわっと必ず伝わっていくような…」などと、自分なりの考えをつむいでいくようになる。よいことも悪いこともそっくりそのまま包み込んでくれる、そんな世界にあこがれ、そのような世界に自分たちがしていきたいと自身を育てていこうとするのである。

子どもたちを見守り、育てていくはずの私たち大人はどうだろう。やむにやまれぬことから、してしまったことをいつまでも引き合いに出しながら、やたらやきもき手を出し、口を出し続け、せっかく育とうとしているところを育っていけないようにしていないだろうか。あとかくしの心を、互いのありかたを問い直す基軸にしたいものだ。　　　　　　　校長　　大林　道範